

僕は木刀を突き刺して、天井からかはるがはる叩き落した。

板の衝立も二つとも、滅茶々に叩き壊した。

時々金あみにかけ上つて、

「俺は釋尊の再来だ」などとほざいた。

そして手當り次第に、つり下つた畳二枚敷位の、赤い總の付いた簾も、眞鍮のつり燈籠も、形を残さないまでに、木刀を振り廻して打ん擲つたのだ。

大きいしやしや木の活けてある丸い花がめが、二つ小氣味好く、粉々に割れて、水が一面にあふれた。

段々僕も勞れた。大鼓をドン／＼木刀でドヤカシまくる。

すると巡査がガタ／＼板戸を向ふ側からゆるがす。

人々が拜殿の踏み段に上つて、好奇心と恐怖にかられた顔をして、ヘツピリ腰で覗く。

僕は太鼓の鞭を放つた。

五六人が駆け足で裏へ廻つたやうだ。